

に違反したことはないか。亡くなった友を思うと、ソ連のやった終戦後のシベリア強制抑留の不当性は徹底して追及しなければならないと考えている。

【執筆者の紹介】

大正十二年十一月八日

岐阜県不破郡荒崎村（現在大垣市長松町）、浄土

真宗（敬思寺）の次男として生まれる

昭和十九年九月

岐阜師範学校卒業

十月

四国松山連隊入隊

昭和二十年四月

朝鮮平壤 師三四二〇七

五部隊転属

八月十五日

終戦 ソ連軍に武装解除される

シベリア抑留（スーチャン、イマン、ナホトカ）

昭和二十二年四月

明優丸にて舞鶴復員

昭和二十二年四月二十二日

安八郡南平野小学校復職

昭和二十五年

結婚、現住所に居を構え、

現在に至る

その後、県内小中学校を歴任

昭和五十八年三月、武儀中学校教頭を最後に三十九年の教員生活を終え、その間、教え子数千名を数え、多くの子弟に慕われておられる。

現在、全抑協岐阜県連の役員として活躍中で、貴重な人材である。

（岐阜県 鈴木 善三）

終戦後五十年を迎えたが

静岡県 石川 博

歓呼の声に送られて我々は祖国を後に、妻子のある者は妻子を残して祖国のために出征した。それを日本国民として誇りに思っていた。赤い夕日の満州に渡り、各所で部隊として行動し、治安維持のため勤務していた。南方の戦闘が激しくなるにつれ、満州の関東軍の精鋭も兵器とともに南方に向かい、戦闘に参加した。

そのため軍隊も減り兵器も少なくなった。日本軍はソ連とは日ソ不可侵条約の締結があるからと油断した。

ソ連のスターリンはそのすきを見て各方面から満州に進攻してきた。南方の戦局が次第に不利となり、二十年八月十五日に無条件降伏という悲しい日を迎えることになった。我々は悲しいけど帰国ができると思っていたのに、ソ連は逆に、シベリア各地へ送り込んだ。七十万とも言われる同胞は、過酷な条件の下で二年から、多い人で十年もの長い間、炭鉱に木材伐採、あるいは鉄道工事などの強制労働に服し、七万以上に及ぶと思われる犠牲者を出しました。

ソ連は何ゆえにそのような人類史上例を見ない無法な事をしたのでしょうか。敗戦国が支払う賠償金を我々が肩がわりにしたのか、いまだに明らかにされないのは、いかにしても納得できません。あの東京の裁判では、多くの日本の指導者が戦犯として裁かれ、処刑されました。しかるに、そのソ連の非道を裁く機関は最早この地球上どこにも存在しないのではないのでしょうか。何といっても、この事実は戦後の出来事でありま

す。日本がポツダム宣言を受諾して降伏したそのあとのことであります。同宣言には、第九条に次の通り規定してあります。「日本国軍隊ハ完全ニ武装ヲ解除セラレタル後各自ノ家庭ニ復帰シ平和的且生産的ノ生活ヲ営ムノ機会ヲ得シメラルベシ」と。この規定に基づいて、米、英の二国は「それぞれの海外に出征していた日本軍人」をすべて、昭和二十一年末までに本国に帰したのであります。だが、ソ連のみは、その勢力下にあった日本軍人、軍属及び一般国民をもシベリアに抑留し、労働を強制しました。この行為は、明らかにポツダム宣言の違反であります。

日本政府の政策で海外にいた軍人、軍属及び一般邦人は、六百六十万とも言われる。特に満州の開拓団は、働ける者は軍人となり、老人や女子供は、そのため幼児の遺棄、先を案じての集団自決、戦死等により、さらに引揚げを待つ収容所生活で病氣、飢餓等により、およそ三割の者が故里の土を踏むことなく倒れて逝った。戦前、戦中、戦後のことを知識として心の中で持たないと、終戦五十年の意味もわからないでしょう。

予定の行動で牡丹江省横道河子へ着いた。道路へ出ても、気味悪くソ連機が一機も飛んでこない。しばらく歩いていくと、後方から日本軍の乗用車が来て「日本は降伏した」と言つて前の方へ行つてしまった。せっかくこの横道河子でソ連軍と一戦を交える目的で集結したのに残念だ。だれもが憤慨した。氣を落とした日本軍は、ただ黙々と目的の地まで歩いた。着いたのは民家だ。まず装具をおろして一休みした。もう慌てることはない。近くに川が流れていた。行軍中はふろへも入れなかつたので、皆川へ行つて体を流した。体がさっぱりしたので背囊を枕に横になる。疲れが出て、横になったまま少し眠つた。何か声がした。ソ連兵が通訳と話をしていた。ソ連兵が行つた後、通訳は中隊長にソ連兵からの話をした。武装解除のことだった。午後三時までに、銃、帯剣、防毒面などであつた。銃はゲキシンを抜いて川へ投げ込んだ。防毒面は土を掘つて埋める。残つたのは背囊、飯盒。私たちは、氣の合った同士で逃げることを約束した。米、塩、マッチ、

円匙、^{つるはし}鶴嘴、背囊についている備品などを分担して持ち、逃げるすきをねらつた。しかし、ソ連兵が十五メートルの間隔で歩哨をしているので逃げることはできなかった。

夕方、拉古^{ラコ}に着いた。先の部隊が立ち去つた後のため汚れていた。部隊は兵舎に入つた。私と他の一等兵二名で糧秣の監視を命ぜられた。天幕を張つて糧秣とともに寝た。薄暗くなるころ一人の一等兵から、衛兵所へ難民がたどり着いたと聞いた。大分弱つているようだと言つたので監視を頼んで見に行つた。その姿は痛ましい。顔色はなく髪は乱れ、小さい四歳ぐらいの女の子は足に豆ができて痛いと言つて泣いていた。若い奥さんらしい人は、赤ちゃんに乳が出なくて、何かないかと言われた。馬鈴薯でもいいと言つたので、私は、兵士の物を盗んではいけないと思つたが、見るに見かねて五キロくらい包んで持つて行つてあげた。八人くらいいた人たちがみんな喜んでくれた。中でも若い奥さんは、手を合せて私を拝むようにして喜んでくれた。私は胸の中で、よかった、本当によかったと

思った。いつまでもその人たちが目的地へ無事で着くように私は祈った。

夜が明けて、朝食をして装具をつけてまた行軍をした。武装解除をされて帯剣や銃はないけど、格好では襟章もついていて、まだ軍人に見える。満州でも八月は暑い。愛河^{あいが}を越したところから、馬や日本の軍人、満人らがソ連兵の機銃掃射で撃たれて死んでいる。嫌な腐ったにおいがした。三十メートルくらい歩くと必ず死体がある。日本も勝ち戦なら葬って先に進むが、ソ連兵の歩哨つきの行軍ではどうすることもできない。ある所では、日本の兵士が三十人くらい折り重なって死んでいて、腐って悪臭がただよっていた。気の毒だ。道路の下だったのでよく見えた。行軍は毎日続いた。

ある日、雨の中の行軍で食事を作りたくても薪がない。そこで我々背囊のある部隊は背囊の形枠を外して集め、それを燃料にして食事を作りました。背囊も枠がないと形が崩れるけど仕方がない。十日近くも行軍すれば疲れも出てくる。無口で歩く。その中でだれかが「もう少しで、綏芬河^{すいぶんが}だ」と言った。行ってみれば

そのとおりで、空襲で駅はめっちゃめちゃで機関車も横転していた。駅を通り抜けて少し歩いたところにソ連兵の貨車が待っていた。その貨車に乗せられた。窓は鉄線で絡んであった。入り口の戸も外から番線で絡んで、中から開けられないようにしてある。

どこへ行くのかわからない。時々三人で馬を組み、外を見て、みんなに外の様子を知らせる。薄暗い貨車の中では思い思いの話が出る。拉古でソ連兵が指を二本出したのが、二カ月なのか、二年なのか、当時は抑留^{りゅう}ということは思ってもいないことだった。しばらくすると、汽車は山の坂にさしかかった。スピードが落ちたようだ。また馬を組んで外を見る。代馬溝^{だいはう}と言った。速力は駆け足より少し早いぐらいだった。後方で銃声が聞こえた。土地勘のある者が逃げたかなと思つた。向こうへ着いて聞いてみたら、三名逃げて三名とも射殺されたと言った。貨車の後方には機関銃が装備してあるので、無理なことだった。汽車は走り続けた。

いろいろな話が出る。そのうちにだれかが「小便が

出たいが困ったな」という声が聞こえた。走っていて、戸は番線で絡んであるので開けられないし、と言ったら、ある者が鎧かざりを持っていて、鎧で突き始めた。根氣よくつついて、二十分くらいで用足しができるような穴が開いたので、みんな喜んだ。我慢するのはつらい。みんなほっとしていた。夕飯もなしで汽車は走り続ける。まるで物を運ぶかのように、食事の時間もなく、便所へ行く時間もなく走った。一夜明けてどこの駅かわからない駅に着いた。戸が開いた。みんな外に出て、外氣を胸いっぱい吸った。水筒に水をくんで汽車に乗る。汽車はまた動いた。二時間くらい走ってとまった。駅のない野原だ。そこでまず飯盒で食事をつくり、やつとで腹へ食物が入った。

少し休んで、初めの車両の順から列を組んで歩き始めた。我々は真ん中へ入り歩き出した。延々と長蛇の列ができた。約二時間くらい歩いたときに、初めの部隊は止まった。そこは平地だった。その場所へ天幕を張って住家とした。敷物は、ソ連兵が用意してあった草を敷いた。自分の寝る場所に装具を置いた。あすか

らの作業について説明があった。炊事に使う薪を取りにいく者、水をくむ者が各幕舎から二名ずつ使役として出た。その使役に出た人たちが言うに、遠い所だと言う。外で説明している間に、ソ連兵は各幕舎に入り盗みをした。時計、万年筆、ハンカチ、国旗などがなくなつた。通訳を通じて、ソ連兵の責任者に抗議した。明日からは草刈りの作業だが？

内地では終戦一カ月になるが、どうしているか心配していることでしょう。妻や子供のある人たちは言うに言われない気持ちでしょう。幕舎の中は明かりがないので、話をする人もいない。出てくるのはため息だけだ。草刈りというと、我々は鎌で刈ると思っている。明日を心配しながら眠った。翌日、ソ連兵がトラックで朝早く来た。持ってきたのは鎌だった。我々が思っていた鎌とは違った。一メートル六十以上も柄がある。刃渡りは七十センチくらいある。こんな鎌で刈るのかと思つた。朝食だけど、食事というような物ではない。湯の中に粉を入れ、それを煮込んで塩で味つけたような物で、それも飯盒のふたに一杯だけで、箸もスプー

ンも必要はない。腹も膨らまない。これが一食だ。こんな食事では体がもたない。どうすることもできない。それでも作業はやらなければならない。

巻脚絆を巻いて外へ出る。みんな冴えない顔をしている。日本の将校が点呼をとる。終わり次第ソ連兵の指示で現場へ向かう。幕舎から遠く離れてはいない。各人が鎌を持って一列の横隊になる。まず初めの人が三メートルくらい刈ったあとで、次の人が刈り始める。一緒に刈り始めると危ないからである。一人間隔は一メートル七十センチくらい。慣れれば上手になる。三日くらい過ぎると刈った草を機械で寄せる。寄せた草を四人で直径二メートルくらいの小山をつくる。それを馬でまた寄せて大きな山をつくる。私が馬に乗れるので、私が乗った。馬の鞍の左へロープを結びつけて、小山の裾へロープをかける。そして、鞍の右にロープの端を結びつける。馬と小山の間は四メートルくらいで、前に進むと小山が動く。その小山を幾山も集めて大きな山をつくる。その山の重さは一トンだという。その山は、下から山の中に三人か四人入り、ホークで

形をつくりながら積み上げる。その草は、ソ連では馬や牛の大切な飼料で、川や沼が凍ってからトラックで運びに来ると言っていた。

ソ連では、川が凍ると道路のかわりになると言っていた。作業が進むにつれて現場はだんだん遠くなる。食事の中身について、中隊長がソ連兵に申し入れをした。しゃびしゃびが若干とろつくようになったが、量は相変わらず飯盒のふたに一杯だけ、栄養が取れるはずはない。炊事に使う薪を取りにいくのに歩いて三十分ぐらい時間がかかるという。帰りには薪を背負って帰るので大変だ。

十一月を過ぎ、体力が衰えてすべての仕事が大変になってきた。やせて目は窪み、歩行が困難になって倒れる者も出てきた。私も小さな石や草株でつまづくようになり、倒れる寸前までいった。私だけではない。そのような体調になると、自分の行く末と郷里のことを思つて、何か心がさみしくなる。数日後、二名の者が薪を取りに行った帰り道で倒れた。幕舎に連れて来る途中に死んだ。他の者もいつ同じような死に方をす

るかわからん。心細くなってくる。二人の死亡者とやせた日本の兵士を見て、ソ連兵の軍医が診断に来た。結果、三百名の者が栄養失調と診断された。あす、病人だけの収容所に行くことになった。残される兵隊は約五百人くらい。いずれ同じような食事の場合、我々と同じようになることは必至だ。食事がよくなつて、我々の後を追わないようにと祈つた。

我々が行く収容所を訓練大隊とも言う。訓練大隊に送られる。その大隊がどこにあるかは、わからない。翌日装具を持つて、ソ連兵の来るのを待った。ヒゲは長く、日は窪み、やせ衰えた姿は死人に等しい。トラックが来たので、分乗して駅まで行く。三十分で着いた。しばらくホームで待つ。汽車は来たが、また貨車だ。一貨車四十名、寒い時なので敷草はたくさん敷いてあつた。中央にはストーブが取りつけてあり、横には薪が積んであつた。奥から詰めて乗った。だれもストーブの近くに來たかつたが、衛生班長が「石川、ストーブの近くにいてストーブを燃やせ」と言われた。私は幸いと思い、言われたようにそこへ座つた。衛生

班長もその近くに座つた。戸は閉まつた。また、外から番線で絡んで外へ出られないようにしてある。みんな疲れて衰弱しているので、話をする者はいない。「これからどうなるのかなあ」と、ため息のよう言う。だれからも返事がない。同じことを思っていたと思う。ストーブも夜になるまでは燃やさない、薪物が少ないから。

夕方汽車が止まつた。食事と便所行き休憩だつた。歩きが遅いので、暇がかかる。座るまでには一時間余の時間がかかつた。汽車は発車した。夜もふけてきた。貨車の中は真つ暗だ。ストーブの火がメラメラと燃えている。その周りだけが赤く薄明るい。でも、貨車の隅まではなかなか暖かくはならない。そのうちに薪も少なくなつてきた。周りの人の下に敷いてある草を外して燃やすようになってきた。貨車の中は冷えてきて、壁は冷蔵庫の冷凍室のように霜が真つ白くついている。その寒さと栄養失調のために、三人の死亡者が出た。私の後ろの者も足を突き出して死んでいた。苦しくもなく、枯れるように死んでいく。人ごとではない。だ

れもが自分を案じていると思う。自分の体に自信がないからでしょう。

汽車の窓が明るくなってきた。夜が明けてきたのでしよう。亡くなった方の処置に連絡をしたくても連絡はできない。六時過ぎ、汽車は止まった。衛生班長がソ連兵に言う。ソ連兵は担架を持ってきた。その間に食事をする。黒パン一切れで、他にスープもない。水筒に水をくんでくる。食事をしている間に死体は運び出された。他の貨車にも死体を運ぶ姿が見えた。

一時間余り過ぎて汽車は発車した。貨車の中は食事が入ったのと、また外の空気を吸ったので気分的にもよくなった。幾らか小声の話も聞こえる。十二時のお昼を過ぎても汽車は走る。三時過ぎに汽車は止まった。番線で絡んであった戸は開いた。外へ出て驚いた。ソ連領内と思っていたが牡丹江だったから。駅へ降りて知っている者は懐かしく感じる。汽車から降りて北の方に歩く。牡丹江の兵舎である。前からいる兵士も栄養失調の方々でしょう、相変わらずの格好で何か焼いて食べている。聞くと豆粕だという。口に入る物は何

でもよいと、豆粕をもらいにいく。収容所の隅に病室があった。その病室にはどのような病人がいるかわからないが、そのゴミ捨て場には鮭の頭や馬鈴薯の皮が捨ててあった。それを見た数人の者が、それを取り合いして争っていた。

きょう着いた三百名の我々には明かりがないので、前からいた方に聞いて、カーバイトを中隊長が手に入れて各班に分配した。カーバイトは缶詰の缶を三個で組み、ガスが出る缶に小さい穴をあける。穴が大きいと明かりが暗くて、早くカーバイトがなくなる。幸い順調にできて、明るい室になった。その夜も私の一人右側の者が、缶詰の缶を抱いたまま壁に寄りかかり死んだ。簡単に死ぬので、そのときは何を考えて逝ってしまうのかな。夜だったので、翌朝、夜が明けるのを待つて葬った。担架を担いでいる者がいつ担がれるか、今の健康状態ではわからない。

数日後、ソ連兵が馬を扱える者はいないかと言ってきた。富谷中隊長が「石川出たら」と言ったので、私も出る気持ちがあったので出た。私が一番早かった。

次々と出てきた十五名で打ち切った。ソ連兵が先に歩いていく。私たちはソ連兵の後ろからついていった。

余り遠くない所で、戦前には満鉄に勤めた方の官舎だった。二軒長屋を自分たちの住む家に改造した。戦前まで住んでいたのもので、掃除をしたら見違えるようになった。その右の建物を馬小屋に改造した。その家の方が大変だ。壁を崩し、床を外して、中に何にもないようにする。その日には終わらなかった。仕事が大変だったので早くしまった。きれいに掃除をした家で、カーバイトで明かりをつけて十五人の家族になった。

収容所から持ってきた食事を食べて一時をみんなで話し合った。カーバイトの明かりで明るかった。まず、みんなの名前と県と部隊を紹介し合った。雑談をしながら、その夜は早く寝た。ソ連兵の歩哨が来たが、すぐ帰った。静かになった。明かりはそのままつけておく。みんな何を思っているのか、何を考えているのか、終戦と食事と、これからどうなるのか、交互に頭に浮かんでくる。いつしか、みんな眠ったようだ。

夜が明けて、みんなのんびり起きる。まだ水がない

ので、顔を洗うことはできない。今までも洗ったことはない。朝食が収容所から届く。相変わらずスープみたいな物しかない。食事の後、外を回ってみた。収容所の鉄条網が近くまでつくってあった。昨日は気がつかなかった。歩哨が自動小銃を持って監視している。室に入って一休みして馬小屋の続きを始める。中をきれいに整地して、取り外した角材を利用して馬をつなぐ所をつくる。その隅に飼料を入れるところを造った。乾草は外へ置き、トタンをかけるようにした。ソ連兵が見に来たが、何も言わなかった。

二日後に、馬が十頭来るとソ連兵から連絡があった。こちら準備はできていた。馬を入れるようになってから飼料箱へネズミが来るようになった。九州の兵隊がそのネズミを焼いて食べた。「うまいぞ」と言っていたけど、だれも本気にしなかった。ある日、飼料箱を見ると、中に二匹のネズミがいた。一匹は逃げたが、一匹は殺した。何気なしに私も食べてみた。思ったよりうまかった。肉を食べていけないので、そのように感じただけでしょう。皮をはいて頭と尾を取れば、量的には

少ない。その後、だれもが飼料箱を見るようになった。見た者が殺して食べてしまう。数日後にはネズミも見えなくなってしまう。収容所の方では今なお毎日のように栄養失調で亡くなっていく。葬る場所も草原で掘って埋めることはできない。凍っていて、ただ雪をかけてくるだけで、もう場所がないと言っていた。前からいる者の話では、千人以上いるでしょうと言っていた。

ある日、ソ連兵の中隊長が馬を車につけよと言った。そして、私に乘れと言ったので、ソ連兵の横に乗って固くつかまつた。どこへ行くのかと思ったら、日本の貨物廠だった。こんな大きな貨物廠が、一週間の交戦でソ連兵の物になってしまったとは思っても悔しい。でもソ連兵の中尉は気をきかせて、豆の吠^{かます}三俵を車の下積みにして、その上に乾草を山のように積んだ。営門の所で歩哨が見てもわからないようにして外に出た。中尉は、我々が食べ物がないと知って豆を積んでくれたと思う。帰りも来たときの道を通った。馬小屋に馬車が着いたので、みんなを呼んで、乾草を下ろし

ながら小屋前に積んだ。最後に豆の吠が出てきたのでみんな喜んだ。中尉は帰った。中尉に対しスパシーボ（ありがとう）とお礼を言った。車を外して早速、豆を炒った。今までは豆粕だったが、本物の豆で、みんなの顔に笑みが出ていた。

馬が来たので水くみもやらなければと、ドラム缶四本のふたを取った。鑽^{かき}で取ったから取り口が危ないので、やすりをかけた。ドラム缶が厚いので手間がかかる。中で火を燃やして消毒をする。よく洗って水くみに行く。水源は五百メートル先に鉄道の大きなタンクがあつて、その中の水をくむ。ドラム缶を落とさないように馬車に縛りつける。水はきれいな水で、我々のふろにも使うことにした。ふろもドラム缶を切つて、木のふたを中に敷いた。体に垢があるので初めの日はくじ引きだ。だれもが先に入りたい。少しでも横にいくと、ドラム缶が熱かった。久しぶりのふろで気持ちがい。収容所の人たちにもふろに入れさせたい気持ちだ。

毎日の仕事は、馬に飼料を与えること、小屋の掃

除をすること、近くの道を馬を連れて運動に歩くことなどで、後の時間は自分たちのことで、ときにはソ連兵の仕事もある。ある日、薪がないので前の家を壊し薪をつくろうとした。屋根に上り瓦を外して天井板をはがした。驚いたことに四人の死体があった。下へ降りて改めて見た。一人は女性で四人とも素肌だ。凍ってローソクのような色をしていた。栄養失調でやせて骨と皮ばかりだ。

満州にいる同胞は皆このような有様かと思うと、またソ連兵が憎くなる。前書きした拉古の衛兵所で会った難民を思い出して心配になった。収容所で死んだ者も、担架で運ばれていくときは着ていても、葬るときには服を取って帰るらしい。それはソ連兵から服の差し入れがないからだ。ソ連兵に言つて死体を片づけてもらい、また薪取りをする。水があり、薪もあるので、東北出身の兵隊が納豆をつくつたらと言ひ出した。豆があるからよいだろう。よいとなつたら仕事にかかる。水で洗う者、鍋を探す者、支度ができて、火をつける。豆が柔らかくなるまでに少し時間がかかる。柔らかく

なつた物を、藁を持ってきてツトをつくり、そのツトの中に煮た豆を入れる。入れたら、ひもでくるくる巻いて、何本かを吠かますに入れてペーチカの上に置く。四日くらいで白くなってくる。そうなれば、しめたものだ。生活にみんな慣れてきて、お互いに毎日が楽しそうだ。雪の降る日は水くみが大変でソリを使って水運びをするが、馬車より静かでよいと思う。豆のおかげで体もみんな調子がよいようだ。私も馬に乗って運動ができるようになった。ある日、ソ連の兵隊が私に競争をするといつて寄つてきた。私はまだそこまで体の調子がよくなつていない。ソ連の兵隊は私が乗っている馬の後ろへ着て、馬の尻を蹴つた。馬は跳び出した。私は夢中で手綱を引いたが馬はとまらない。仕方がないと思つて私も走る気になり、馬の下腹を蹴つた。馬は本気に走り出した。私の馬は運動で乗つたので鞍などは乗せてない。また、手綱といつてもロープの綱で正式な物ではない。私は一瞬、無事を祈つた。私の馬は速い。気持ちよく速かった。馬の名はゴーボルで、その後、ソ連人の将校が借りに来るとき指名してきた。

馬にしてみれば迷惑だ。ドイツの馬もいたけれど、足が大きくて蹄鉄がなかった。

二頭ずつ爪を切ることにして、氷上のために蹄鉄につける鋏を乗馬に限ってつけることにした。豆のおかげで完全とは言えないがつまりたりすることはなくなったが、私は歯が痛くなり、下あごの右側の糸切り歯がはれてきた。収容所にいる衛生班長を呼んで診てもらった。化膿しているけど、もう少し化膿したほうがよいと言った。二日後に来て診てもらい、もうよいでしようと言った。手術する医療器具はないので、針金を探してきて、コンクリートの所で細くすり、先をとがらして焼いて消毒をした。ヨーチンで歯のところを消毒して穴をあけた。痛かったが、二人で私を押さえていた。膿が出たら楽になった。このときの膿が帰国後も出た。衛生班長が三日間、消毒のためヨーチンを塗りに来てくれた。その班長とは帰るまで同じ収容所にいた。このようなことがあつて楽しく生活していたが、いつまでもそのようなわけにはいかない。二十一年四月三日、再度、シベリアへ行く命令が出た。

収容所にいる同志の皆さんも、幾らか体も回復したようで何よりだと思った。部隊編制して今度出発するのは約八百名くらいと聞いていた。私たちは最後の中隊で、最後の小隊で、最後の班だった。牡丹江の駅で汽車（貨車）に乗った。一日じゅう乗って着いた駅で車中で一泊した。夕食と朝食は黒パンが出た。夜が明けて明るくなるのを待つて下車した。どこだかわからないが、国境から遠くはないと思う。また長蛇の列だ。缶詰の缶を腰から下げ、巻脚絆を巻き歩く様は、前書きしてあるが、見事な乞食の部隊に等しい。途中から山道に入った。右側に川が流れている。幾らか道は登り勾配で、山の木も高山に生えているような木だ。午後と同じように登った。すると頂上に来たのか下り坂になった。水も道に流れる。しばらく歩くと収容所が見えた。腹が減った。そこで食事をする。その収容所には、夜になるとブヨがいて、頭や顔に布を巻き、手も布を巻かないと眠れないようだ。聞けば、ブヨは出てきてちよつとしたすき間から肌の方へ入ってくるという。我々もその通りにして、首と手首にボロを巻

き、一夜を過ごした。それでも歩き疲れてよく眠った。

朝八時に起きて、朝食をし、九時過ぎに出発した。

四時間くらい歩いて目的地へ着いた。山の中で、川はきれいな水が流れている。冷たくて一分も水に手を入れておけないほど冷たい。その場所も住む家がない。

今までのところへ天幕は使って置いてきたので木を切ってつくるしかない。マムシがいるので土間では寝られない。五十センチくらいの床をつくり、木の枝を渡して、小さな枝を横に並べる。屋根は露がしのげる程度に木の枝をかける。仕事は建築なので、セメント袋を上張り、徐々に住みよい形になる。

幸いこの近くには、わらび、よもぎなど、食べられる草があったので幸いだった。建築に必要な石を山から落とす。石を取った跡には、必ずと言ってよいほどマムシがいる。そのマムシは栄養源の貴重な食糧で、みんなで分け合って食べる。また、山の中を棒で落葉をかくと、カタツムリが出てくる。そのカタツムリを焼いて食べると、ちょうどナガラミ（貝）のような味がしてしこしこする。うまいと思った。ここには種々

の食べ物があった。しかし、いつまでもとは言えなかった。また飲み物は、木の幹をナイフで斜めに傷をつけて傷の下に缶を置いて、しばらくして行くと木の水がたまっている。その水は少し臭いが栄養があると思つて飲む。

夜は寒いくらいだ。朝は郭公鳥が鳴いて気持ちがいい。住まいが家らしい家でないので、着たまま、巻脚絆も巻いたまま、軍靴も履いたまま寝る。そのために、足が痛いと思つて巻脚絆を取つてみたら、山にいるダニが血を吸つて、丸く豆のようになっていた。たばこのヤニがないので、ナイフの先をなすだけ深く差して取った。なけなしの血が出た。仕事は毎日基礎を造る作業だが、途中大きな石が出るので暇がかかってしまう。ソ連兵は早くやれとうるさく言う。「お前やれ」と言いたくなる。また、少し離れたところで道路作業が始まった。私たちの中隊は、隊長以下約百名がその作業の担当になり、そちらに回された。また初めからの仕事だ。ソ連兵が道路幅を決め、その幅の中の木を切る仕事で、それが終わるとブルドーザーが来て整地

する。その道路の外側に一メートルの側溝を造る。その側溝をエンピで掘る。その仕事は体が丈夫なときならよいが、当時の体では大変な仕事だった。

夕方には、野草を取って帰る。それが楽しみで、帰れば火があつちこちで燃え出す。楽しみの時間だ。何でも口へ入る物があればよい。ふろも丸木を組み中へ土を塗って石灰を振り掛ける。二間四方の家ができて、ドラム缶のふたを切つて焚き口にする。缶の周りに川から石を拾つてきて積む。石はドラム缶の熱さで焼けてくる。それに水をかけると蒸気が出る。その蒸気で体を洗う。垢がよじれるだけで洗い落とすことはできない。川まで行つて洗い落とす。

この収容所は種々と自然の食物があつてよかったが、六月十六日に移動の通達が来た。三百人ほど人員を残して、あとは移動した。ウオロシロフ地区、ヤクドニヤへ行くことになり、駅まで歩いた。また貨車に乗り移動した。途中二百人降りて、我々はヤクドニヤへ向かった。ヤクドニヤは小さな町で軍隊も近くに あつた。着いたのは大きな元馬小屋だという。中は二階になつ

ていて、三百人入るようにつくつてあつた。

まず鉄条網を馬小屋の周りに二重につくつた。近くに民家があるので、近寄らないためだという。仕事は三階建ての鉄筋コンクリートの家で、戦争のためつくりかけの佐官官舎で、セメンで壁を塗る仕事で、私は塗ったことがないので見ながら塗るが、ノルマがあるので困つた。

七月にはコルホーズに五十人出張する。五個の天幕をつくり十人ずつ入つた。敷物は、草を刈つたので厚さ十センチくらい敷く。天幕の仕事が終わつたので、みんな休んでいた。すると、ソ連人の伍長と兵隊二人が各天幕を探し物をするかのように覗いていた。私を見て、来いと言う。私が何かと思つて行くと、ソ連兵の炊事をやれと言う。ソ連人の食べる物はわからないので断わると、仕事はしなくてもよいから炊事だけやれと言つた。班長は田中班長なので話したら、「いいよ、適当にやればよい」と言つたので行くことにした。すぐ近くの木陰のところに土を掘つて土手をつくり、そこへかまどを造つた。ソ連人がやつてくれるので私

は見えていた。歩哨は五人いるので、水くみもソ連人がやる。これは「楽なもんだ」と腹の中で思った。夕飯からの飯のつくり方を教えてもらう。昼と夜はパンとスープ、朝は御飯とスープ、比較的に簡単だ。御飯は日本食より若干柔らかく炊き、片方で玉ネギを油で炒めて御飯の中へ入れて混ぜる。塩味をつける。私も食べてみたがおいしかった。また馬鈴薯の場合も、同じように炒めて馬鈴薯をすりこ木で半つぶしにして混ぜる。この作り方もおいしいと思った。復員してからもつくったことはある。スープは大体肉と玉ネギ、ほかには馬鈴薯を切つて入れるとかで、他に変わった作り方がないので楽な炊事だと思った。また、ニシンの樽漬をそのまま皮を取つて食べるときもある。私が日本では焼いて食べると言つて、教えてやつた。ソ連人も食べておいしいと言つていた。そのような食べ方を知らなかったのかなと思つた。私もソ連人の食事を一緒に食べるときもある。

食事が終わると班へ帰る。みんなが作業に行くと、私は炊事場へ戻り、薪を取りに行く。ある日、猫を犬

が追いかけた。猫は炊事場の上の木に登つた。よせばよいのにソ連人が銃で撃つた。命中して猫は下の川に落ちた。私は流れていったと思つたら、班内の北原という上等兵が皮をむいて鍋で煮ていた。みんなが、私が班へ行つたらこれが何だかわかるかと聞かれた。まさか猫ではないと思つていたのでわからないと言つたら、さつき撃たれた猫だよと言つた。私は驚いた。猫の肉は泡立つと言つたけど、本当だ。泡がぶくぶくしていた。その泡がシャボン玉の赤とか青のように見える。「食べてみる」と言つたので食べたが、肉は柔らかでまづくはなかつた。

数日後、雨が降つた。ソ連人の炊事場も屋根がないので行かなかつた。みんなも雨では仕事ができないので寝ていた。お昼に食事をして、また寝てしまった。雨は大降りになつた。私もうとうとしたが、何か滲みしてきた。見ると、敷草と敷草の間に水がきていた。びっくりしてみんなを起こした。自分の装具を持って外へ出た。ひぎのところまで水があつた。私は装具をみんなに頼んで炊事場へ行つた。ソ連人も来ていた。釜、

鍋、腰かけなど、ソ連人が持つてきた車へ乗せてロープをかけて、水の中を車を挽いて民家まで行つた。深い所では腰まであつた。ソ連人も同じだ。民家へ着いて、鍋、釜を下ろして、自分も着ている物をかえた。民家に独身の女性がいたので、その女性に炊事を頼んだ。私はお払い箱になつた。氣を使うことがなくなつてよかつた。

しかし、作業に行くときは、「石川、イジシユダ」と言う。その言葉は「こちらへ来い」という意味で、いつも私を呼んだ。しかし、毎日ではない。コルホーズの監督が来て「五名出よ」と言われて出た。私もその一人で、そのソ連人の後をついて行つた。よくよく馬小屋に縁がある。その馬小屋は馬の小便で三十センチもたまつていた。仕事というのは、その小便を出して、下に沈んでいる糞をバケツですくつて手で馬小屋の壁に塗ること、みんな顔を見合わせた。我々はこの汚いことをしたことがない。ズボンを膝の上までまくり上げたが入れないので立っていたら、ソ連人が後ろから押した。仕方なしに入ってしまった。小

便を吸い出す。少なくなつたので糞をバケツですくい、そのどろどろを手で壁に塗るいやな仕事だ。こんな野蛮な仕事があるかと腹が立つた。お昼がきて手を洗つても黄色い色は取れない。においもついている。幸ひ私は午後から仕事が変わつた。他の人たちは三日も続いたと愚痴を言つていた。氣の毒になつた。

馬鈴薯の收穫が始まつた。エンピで起こして取る。帰りには、みんな土を取つた馬鈴薯をズボンの上から入れる。ひざの下でひもで縛り、格好がおかしい。しかし、ソ連人はそれを何とも感じないのか、歩哨がついていても何にも言わない。我々にはちようどよい。早速帰つて、いもをゆでて食べる。ソ連人にもやつた。ソ連人も喜んで食べた。数日は馬鈴薯で食が延びた。大豆の收穫も続いてある。大豆の木を抜き、束ねて機械の所へ運ぶ。ソ連人は大豆を生で食べる。我々とはとても生臭くて食べられない。私に生で食べてみよと言つた。私は我慢して食べてみた。少しだと臭いが、十粒くらい食べると甘味が出てくる。なるほどと思つた。私は逆に大豆を飯盒のふたに入れて炒つて食べさ

せてやった。日本人はこうして食べると教えてやった。ソ連人も、うまいと言ってくれた。

ちょうどそのとき、女子大生が手伝いに来た。やはりこの国の子も仕事は嫌いなようで、話ばかりしていて、コルホーズの監督にしかられた。このような女子大生がノルマの国の学生かと、その矛盾さを知る。

このコルホーズの一番のご馳走は馬の肉で、みんな食べた。公ではないが、夜の間に馬が放馬して汽車の線路に入り逃げ場を失った。三頭がひかれて死んだ。その馬を片づけるため近くの山に埋めた。その使役に十人の人が行った。馬は大きいので穴を掘るのに大変だったようだ。その馬に目をつけたのが埋めに行った十人で、みんなに隠れて行っただけ煮るときに見つかってしまった。他の者も埋め場所を聞いて馬の肉を取りに行く。話に聞くと、しまいには、尻の方の肉のあるところは肉がついていなかったという。何でも食べられてしまう。

コルホーズの仕事も終わりになった。少しのんびりして、十月の末にヤクドニヤへ帰る。余り仕事が進ん

でいなかった。今までとは違って何か縛られているような気がする。また、政治的な面もあって？ウオロシロフから三名の活動家が回されてきた。収容所の雰囲気が一変した。我々は今までの将校を軸にしてきた。また、軍曹や伍長を班長として作業の組織をつくってきた。その組織を砕いて、組織の頭をかえようとした。そして民主グループをつくり、将校の吊るし上げを始めた。

十一月にもなればシベリアは寒い。その中で真っ裸にして土間に正座させ、○○中尉はいつこのようなことをしたとか、服の新しいのを先に着たとか。大体、吊るし上げの基本はゲーパーウの資料だと思うが、張り切ってそのようなことを言う。年は若くて、余り利口そうでもないのが指導者になっている。ソ連の憲兵だと肩を張っている。そのために、だれも何も言わないが、心の中では、この野郎と思っている。将校の人たちはそれから重労働と便所の掃除で、食も一食抜きだという。作業に行ってもおもしろくないのでサボってしまふ。デマが、どこからとなく伝わってきた。そ

のため我々は、三名の指導の下でなしに独自の行動隊をつくった。沈んだみんなの気持ちを和らげる意味もあつて三十名で組織した。そしたら三人の指導員が調子に乗つて、社会主義や共産主義の本を持つてきて、夜読ませた。だれも本気ではない、形ばかりだった。困つたのは作業の建築の監督だった。みんな面白くないので作業能率は上がらない。監督は作業班長を呼んで作業がおくれた理由を聞いた。監督はそのことを上司に報告しようだ。

二日後には、三名の指導員と称する者はいなくなつた。ソ連では政治部員と労働関係とは一体になつていないのかと思つた。みんな気分的にも元気が戻つた。将校の顔も明るくなり、作業の能率も上がつてきた。食事多少よくなつてきた。朝は粥、昼食は黒パン一個三百五十グラム、夕方は少ないが米の飯となつた。パンを切るにも飯を分けるにも、自製の秤をつくり、みんなの厳しい眼差しの中での分配だ。時間がかかるので、熱い物も冷えてしまう。分けた食事はゆっくり食べるが、量が少ないので腹の虫が鳴く。

作業に行つて昼食のパンが終わると、日当たりのよいところで一齐にシラミ取り、毎日の日課だ。腹巻、パンツ、シャツのシワ、縫い目にはシラミが並んでいる。ある日、ソ連人の将校が見て、日本の兵士は何をしているかと通訳に言つた。通訳は正直に、毎日シラミを取っている、と話した。しばらく日が過ぎて、ソ連人から入浴するように達しがあつた。入浴場（バーニヤ）には煮沸専用の自動車がきていて、入浴が終わるまでには衣類の煮沸が済んで受け取れるようになっている。また、シラミがつかないようにと、女医が三人腰かけていて、その前で両手を上げ、脇の下の毛と局部の毛をそつてしまう。初めてのことだが、元気がないからよい。煮沸してもらいシラミがいなくなつたので、よく眠れるようになり、作業に行つた。昼食時にシラミを取ることがなくなつた。常にふろへ入っていればありがたみがわからないが、入つてないとよくわかる。

作業も進んだ。私はペンキ屋になり、室の中の裝飾で上を白、腰の方を色を変えて塗る。また、腰と上の

間に色を変えて線を塗る。きれいな室ができる。出入口のところはセメントが半乾きのときに色の粕を振り、コテですり込む。そのようにすれば色が取れないという。ソ連人のそこがおかしい。寒いときには鉄板の上に砂を乗せ、下から火を燃やす。砂の凍ったのが溶けたらセメントを練る。割合は日本と同じで一・三・六の割合で練るが、春になって暖かくなると、凍っていた壁はボロボロ落ちてしまう。初めに塗ったときにノルマで作業パーセントをもらっているので、二度目のやり直しの場合はパーセントなし。二日分の仕事をしないと食事はいただけない。ソ連の憲法では、「働かざる者、食うべからず」とある。逆の面もある。

ある日、雪で糧秣がこなかった。ソ連人の歩哨は「作業に行くから外に出よ」と言ってきたが、通訳が出ていって、食事をしていないから仕事には行かないと断わった。歩哨も仕方なしに帰った。このような例がある。コルホーズの場合、作物が順調に育って収穫が百パーセント以上ならばよいけれど、それ以下の場合は割合によって食を減らされるとか。また私たちの

収容所の北側を流れる川が、早く春が来たので、雪や氷が溶けて畑に氾濫して馬鈴薯が腐り、食糧の割合が減り困ったと聞いている。我々の収容所にも、ソ連人がパンを欲しいと、タバコを持って交換に来たこともあった。

そのころ、我々の収容所は、秋から冬にかけて野菜がなく、また野草もないために壊血病が始め、毛穴から血が出るようになってきた。ビタミンCの不足からだと思う。とりあえず山で伐採をしている方々に松葉を送ってもらうこととして、その松葉を細かに刻み、朝の粥と夕方のスープに入れることにした。初めは、やに臭くてのどを通らなかった。しかし、壊血病になるよりはよいと、仕方なしにみんな我慢して食べた。松葉を食べることも初めてだ。このような生活がどこにありましようか？

二十二年四月二十五日、ペイルイチカに作業援助のために行くことになった。終日歩いた。我々を見てソ連人の子供が「ヤポンスキー、プレンニイ」とばかにして石を投げる。大きい石ではないが体に当たる。悔

しくて「このばか野郎」とどなり返してやる。「ヤボンスキー、プレニイ」とは日本の捕虜という言葉です。日本の軍人も今となつてはどうすることもできない。情けないことだ、日本では親や子供、それに妻、兄弟が待っているのに。そしてこのようにソ連人の子供に石を投げられているとはだれも思っていないでしょう。神様や仏様に無事を祈っているのにと空しい感じがした。

目的地へ着いた。この収容所には住むところはあつた。作業は草刈りで、前のところで一度草刈りをしていたので、仕事は楽だつた。ある日、このようなことが起こつた。昼食を食べて休んでいるとき、だれかがたばこを吸つて、そのマッチ棒を捨てたので草に火がついた。それを消そうと思つて上衣を脱いで払つたが、火は飛び火して広がつた。みんな延焼を一生懸命に防いだ。ソ連人の憲兵四人がジープを走らせてきた。昼間の火事のため火の回りがわからない。歩哨も消しに入つた。やつと、火が消えた。みんなため息の連続だ。憲兵が前に出て、大声で怒つた。そして、全員銃殺

すると言つて、五人ずつ縦に並べた。私は三列の前から三人目に入つた。ソ連人が自動小銃で各列の前で銃を構えた。五十名なので、五人ずつで十列になる。これで終わりだと思つた。観念して家のことを思つた。一瞬静かになつた。そこでソ連兵の上司らしい憲兵が「やめ」と言つたと思う。銃の構えを解いた。ああ、よかつたと胸をなでおろす。ソ連兵は強い言葉で言つた。「ソ連の草は大切な家畜の飼料だ、このようなことがないように」と注意して立ち去つた。その後、みんなも氣をつけるし、たばこを吸つた者にもみんな強く言つた。同じような仕事が続いたが、六月一日に本隊へ帰ることになつた。帰りも歩きだ。終戦直後とは違い服装も種々で、歩く姿も初めの行軍とは違ふ。食器は腰に下げ、三個ぐらいの缶が重なつてゐる。どう見ても立派ではない。子供が何か言うことも無理ならぬことだ。

本部へ来ては、また、佐官官舎の仕事がまだある。外周りの仕上げで、三階から下へ外から壁を塗れと言ふ。私のいる班が受け持つた。命がけの仕事で、横五

メートル、縦一メートル、深さ六十センチの鉄枠をつくった。その枠の中に二人入ってはけで塗るのはよいが、その枠をつるにロープで屋根の棟の上を越して裏側で引つ張る。怖いことだ。三階から落ちれば死んでしまう。能率が上がらない。翌日噴霧器を持ってきて、ソ連人がやってくれると言われたので、私たちの班は用がなくなった。

また私は他の人と、佐官の監督の家の壁を塗ったりペーチカをつくりに来てほしいと話があった。他の人とは、九州の出で高柳という二等兵だった。初めてで道がわからないので監督についていってもらった。歩いて三十分くらいかかる。翌日から二人で行けと言われたので二人で行く。マダムが食べ物を入れて、サービスがよかった。糸とか針をくれる。一週間くらい過ぎたとき、土手の向こうから戦車が次から次と現われて走ってくるので、土手に上がって見た。そしたら、山の下の方から登ってくる。格納庫があるらしい。ソ連人の家も、もう十日もしたらできると思ったけど、その二、三日後にゲーペーウに捕らえられた。それは、

日本人が勝手に歩哨なしで歩いてはならないということ、その事務所で歩哨が来るのを待っていた。あすから監督の家へ行けなくなってしまった。

作業は佐官官舎から兵舎建築に移った。外壁はレンガ積みだが中は木材を使った兵舎で二階建ての建築で、外壁から仕事は始まった。季節もまた三年目の冬がやってきた。外壁のレンガ積みはセメンが凍らない前にと仕事を急いだ。レンガ積みも二重で、レンガとレンガの間は約レンガの幅くらいあけて積み上げ、その間に炭殻（石炭を燃やした殻のこと）を入れて保温のため使う。そのような積み方をするので時間がかかる。中に大きな柱のかわりにレンガを積み上げた。中の床板や種々の材料が必要のため、製材の作業にも行った。収容所から約三十分くらい行ったところに製材所がある。製材所と言っても、トラクターのエンジンを利用して作動していた。板をひくには板の寸法に鋸を何枚もはめ込み、一度に何枚もの板がひけるようにつくってあった。学問的な頭はないが、生活的な考えがあると感心した。ここの工場へ半月くらい通ったけど、そ

の中に寒い日があつて、腰に下げた黒パンがこちこちに凍つて食べられないときもあつた。

ある日、寒暖計を見たら、零下五〇度にもなつていた。歩哨に言つて作業を途中で帰つた。ソ連の憲法で五〇度を超した場合は仕事をやめてもよいということになつてゐる。働かざる者、食うべからずと同じである。

製材の仕事も終わり、兵舎の作業にまた替わつた。一月過ぎた時分にソ連の兵士が凱旋するようになり、兵士がトランクをつくらんかとある者に言つた。そのことを大工さんに話したら、つくつてみるかと言つて、材料を集めてつくつた。ペンキを塗つて仕上げたら、見た目のよいトランクができた。一個十ルーブルで売つた。そのことが他の班に知れて、まねをしてつくるようになった。夜は、あつちこつちでにぎやかだつた。また、その材料を持ち出すのに苦労した。板を背中へ縛りつけて落ちないようにする。ペンキは塗る所があるからと要領よく持ち帰る。歩哨が頓着しないので、その点はよかつた。毎日数人の兵士が鉄条網の外から

呼び出しては買いに來た。それも、いつまでも続かない。一時期に限られた。

その当時、我々にも、家にハガキを出せと一枚ずつ渡された。いる場所は書かないようにと言う。ただ元氣でいるとしか書くことができなかった。ハガキを出すなら、まだまだ帰れないのかなと思つたり、帰れるからだと思つたり。今までソ連人から何回帰れると言つてだまされたかわからない。当時聞くに、ソ連は日本を赤化するために教育が進んだところから帰していると聞かされた。波状作戦で歸しているとか？ソ連の事は分からん。四月の半ばにまたコルホーズに五十人が行くことになった。今度は前に行つてない人たちが送つたようだ。その中に菊川町の森下作市さんがいた。私より年はとつていたが開拓団にいた人で、元氣だつた。残つた人たちは兵舎の仕事に行つていた。

ある日、急にソ連兵が入つてきて、装具を持つて外へ出よと言つた。みんな慌てて支度をした。将校と炊事の者を残して全員がトラックに分乗した。またどこへ行くのかわからない。何回もうを言われているの

で、信じなかった。しかし、今度は本当らしい。四月三十日にワズミジンコに着いた。ここはナホトカに行く前の収容所だと聞いた。うれしいけど、そのうれしさを押さえた。五月四日、ワズミジンコを出発してナホトカに向かった。ナホトカに着いてから、ソ連から見て反動的なことを言うと、また後方の収容所に送られる、そのようなことがあったと聞いた。

輸送されるのに、その組織をつくった。そのときに私が最後の小隊長と指名された。私の小隊は西の方が多く、特に大阪の人たちが多かった。大阪の人たちは口が達者なので、慎んでもらうように頼んだ。いよいよ乗船のあいさつがソ連人の大佐からあった。ちょうど話の途中で日食になり真っ暗くなった。少し寒いくらいだった。一人一人、住所、氏名の確認をして数時間後に乗船することとなった。船名は「信洋丸」、二千三百人の日本兵士が乗った。信洋丸は貨物船で、船底が私たちのいるところだ。用事がある都度、鉄のはしごを登って連絡に行かなければならない。船の中でいろいろ書く物が多い。船底にはアンペラが敷いてあ

るだけ。私も船酔いして吐いた。それでも次々と連絡がある。ソ連にいて死亡した者の住所とか、名前とか、知っている範囲のことはお互いに知ってもらい、また教えていただいて、帰らない人の連絡とか、帰国する者の務めとして当然だと思う。

五日前までソ連兵の下でヤクドニヤの、あの馬小屋の中で生活が思い出される。みんなも安心したのか、顔に何か抜けたところが見える。途中、誘導船が離れるまではみんな緊張していた。誘導船が離れたと放送があった途端、緊張が解けた。沿海州を渡るときは、船底で体がころころ転がった。みんな気分が悪くなつて、吐く者が多く出てきた。船底では、どうすることもできない。船壁の上の方に丸い窓がある。明かり取りだ。五月九日に乗船して三日目、船の中の食事は日本食でお昼はカレーが出る。昭和二十三年五月十三日の朝、「島が見えた」と甲板にいた者が言った。みんな出て見たが、まだ淡くてわからない。時間がたつに従ってはっきり見えるようになった。みんなの顔は明るい。しかし、あの寒さ、そして、食がなくて栄養失

調になって、何度もつまずいたが、おかげで今日この信洋丸の船上で日本を見ることができて、本当にうれしい。ありがとうございますと合掌した。

舞鶴の湾の山々は絵のように見える。そして左右の山々が信洋丸を包むかのように、船はその奥へ奥へと入っていく。桟橋が見えてきた。船はまだ奥へとゆっくり、滑らかに行く。船は止まった。渡し舟が来る。白衣を着た医師と看護婦が来た。

懐かしい、しばらくぶりに見る日本人。内地へ来た実感がする。順序よく降りて渡し舟に乗る。渡し舟は復員者を乗せると、ゆっくりと走り出す。数分で桟橋に横づけになる。内地の土に第一歩を踏む。感無量だ。大ぜいの人が出迎えてくれる。マイクで、「皆さん、ご苦労さまでした」と呼びかけてくれる。涙がほおを流れた。未帰還者の家族の方々が、夫や子供の名を書いたのぼりを私たちの方に向けて、「知りませんか」と呼びかけてくる。我々はその前を通り抜けて復員局の建物の中へ入る。種々説明があった。その後でDDTでの消毒があった。ふろ場に行つて入浴する。久し

ぶりに湯がいっぱい入ったふろに入つて気持ちよかった。衣服が渡されて、各小隊ごとに室に入った。名を呼ばれた者は調査室へ行つて調査を受ける。人によつて調査の時間が違う。私は早く終わった。

留守家族から来ているのがき、手紙が置いてある室があつて、私はそこに行く。私のところへは一通も来ていなかった。がっかりした。家の人たちは私のことを心配していないのかなと、半分やけになった。自分の心は曲がつた。家へ行かずに東京まで行こうと、心は決まった。

久しぶりに日本のお金が渡された。売っている物がチラシで回ってきた。その中には、スルメ、リンゴ、菓子類があつた。個人個人で行くと込み合うのでまとめてほしいと要望があつた。私が十四人分をまとめて買ってくる。その夜、復員のお祝いがあつた。珍しく酒、三勺くらい出た。久しぶりに飲む酒は身にしてみた。元気のよい者は、近くの病院へ行つて看護婦を連れてきて、歌を歌わした。その時はみんな喜んだが、後が悪い。そのために我々は三日ぐらい罰として後に回さ

れ、後で来た人たちが先に帰った。悪いことをしたのが悪い、仕方がない。三日後に復員列車に乗った。

京都では、共産党の方々が大きいで出迎えてくれた。次に綾部にとまった。婦人会の方々が豆とか菓子をくれた。また女子学生が「引揚げ、ご苦労さま」と書いた手紙をくれた。私はそれを読んで、すっかりしたことが書いてあり、また字も上手に書いてあると思う、いまだにその手紙を持っております。折に触れては同士に見せます。その学校は京都府立亀岡高等学校で、手紙を下さった方は中川次江さんで、本当にありがとうございます。

列車は数時間過ぎて、浜松に着いた。私は、駅には東京へ行くつもりだったので降りませんでした。そうしたら、弟が私を見つけたので仕方なしに降りた。弟も変わって頭の毛を伸ばしていた。また、妹も嫁入ってその婿がいた。ほかに親戚の代表が三人いた。いろいろと話を聞くと、三日前には多くの人が来てくれたと言った。三日前のときには学校の先生が新聞を見て知らせてくれたとか。それでも掛川の駅へ降りたら、

近所の人たちも自転車で駅まで来てくれた。本当に懐かしかった。私は榛葉直さんの自転車に乗せてもらい帰りました。榛葉さんの自転車はノーパンクでがたがたしてたのが印象的で今でも残っております。

家に着いて親にあいさつをして、外へ出て近所の皆様にお礼とあいさつをした。また家に入って種々話を聞けば、勝手な思いをして東京へ行くなんて申し訳ない、自分を恥じた。毎日私に陰膳を供えて、珍しい物があればまず私に供えてくれたという。そのころ、家ではお茶刈りの最中で、私一人おいて畑に行ってしまう。私は皆が帰ってくるたびに眠っており、五日目ころには「よく眠れるな」という声が聞こえた。私は一週間くらい毎日そのようにして寝た。それから、ぼつぼつ外へ行って、以前と変わっていない道を歩いた。隣が役場だったので、遊びに行った。また忘れないうちに、召集から転々と変わった部隊を書いたり、ソ連領の中の移動月日や、わけのわからない地名を細かく書いた。そのかいあって、この体験記を書くのにも役立ったのです。

また、船上で情報交換をしてつかんだ連絡をした。

菊川出身の方は奥さんが北海道にいたけど、五歳の子供を連れて来てくれた。知ってる限りのことを話してあげた。喜んで帰った。また掛川の中で名の通ったお宅の娘さんの婿さんのことを聞いてきましたので、その宅へ行き話しましたが、親も娘さんも余り喜んでくれないかった。話してあげて悪かったかと思うと、複雑な感じがした。

それから、何をするともなく数日が過ぎた。

六月に入った。家の人は田の仕事で忙しいようだ。

ある日、一通の公用の封書が来た。中を見ると、進駐軍の司令部から三泊四日で出頭せよとの文章だ。今までソ連人との生活で、外人と離れて幸いと思っていたのに？中に横文字で書いた手紙と復員局へ行く地図が入っていた。何だかわからないが行ってみることにした。当時、米を持っていくのに村長の許可証がなければ持ち運びはできなかったので、役場に行つて書いてもらう。当日六月十日に着くように前日夜、汽車に乗った。汽車は満員でしばらく立っていた。途中降りた

方があったので、その場へ行つて腰をおろした。数時間寝た。五時に四谷に着いて、駅でお茶をもらつて食事をする。復員局を聞いたなら、十分も歩けば行きますよと教えてくれた。

食事を済ませて歩いて行つた。駅の方が言つたように、あつた。復員局の方が朝早いの腕章をつけて立っていた。聞いて宿舎に入る。少し間をおいてみんな集まる。聞けば、信洋丸で来た人ばかりだった。三十五人の人に公用書類が行つたらしい。十時に集合してバスに乗り、進駐軍の司令部に行つた。一階の室に入つて説明を聞いた。午前中は一時間くらいしかなくて、お昼になった。食事はパン食だ。お膳には、パン、ミルク、サラダ、たばこ二本がついていた。ミルクを少し飲むとボーイが来ていっぱいにしていく。たばこを一本吸うとまた一本加えていく。サービスはよかった。午後一時から始まる。二時間ぐらいで終わった。バスは待つていた。宿舎へ帰つて、みんなと話し合う。

その夜、夕食後四人で新宿へ出た。やはり東京だ。物が無いといつても夜店にはある、よい物、悪い物に

限らず。私は靴を買ってきた。翌日も同じ時間にバスが来た。今日は昼食を食べて終わった。少し休んでみんな帰った。私も夜、掛川に着いた。

私は十二月十日に、もう一度進駐軍からの出頭命令がきた。三泊四日の日程だったが、一日で済んだ。そのときには特別で三階のアメリカ人だけの室で調査した。そのときには三世の方で日本語はあまり通ではなかった。帰りにはホールへ行つて、コーヒーを飲んでいろいろ話をした。お土産に珍しいアメリカのお菓子をくれて、家に土産に持つていけと言った。一人だが歩哨が出口まで送ってくれた。外にはジープが待つていて、復員局まで連れて帰ってくれた。私は、お礼を言つてジープの運転手と別れた。宿舎の管理人が満水の出身で竹島さんと言った。近くの人ということで、夜も遊びに来てくれた。また、火鉢の炭も多分に用意してくれた。翌日、お昼を食べて帰る。

ソ連は、日ソ不可侵条約を破つて、他国の弱みにつけ込み進攻してくるような国で、抑留者に食も与えず、衣服も与えず、ノルマで強制労働をさせ、七万人とい

いますが、途中の死亡者を加えればそれ以上の死亡者があつたかのように思います。この体験記を書いておりますと、最近のことのように思われます。上司の顔、同年兵の顔、また途中で知り合った友の顔が思い出され、胸の痛みを感じます。

亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。

また、強制労働と寒さと飢えをしのびながら帰還し、今なお同志として活動しておられる方々のご健康とご多幸を祈りつつ、終わらせていただきます。

【執筆者の紹介】

大正九年九月十四日

小笠郡東山口村伊達方四十番地に生まる

昭和十年三月

小笠郡東山口村立小学校高等科二年卒業

昭和十七年二月

豊川海軍工廠に徴用

昭和十九年四月十日

中部第九部隊に入隊

昭和二十年四月

選抜上等兵に進級、斐徳司

令部にて勤務

昭和二十年八月十七日

横道河子にて終戦

昭和二十三年五月十三日

ナホトカより帰る

昭和四十三年四月

掛川市栄川中学校PTA会

長

昭和四十八年四月

掛川工業高校PTA会長

昭和五十四年一月十四日

全抑協補償運動に参加

(静岡県

石川 八郎)

北朝鮮敗走二週間と

シベリア抑留二年記

滋賀県

松村 晋二郎

まえがき

私の軍歴は、敗戦まで一年足らずの短期に三つの連隊を転属している。在ソ期間も一年八カ月と短期であり、他の収容所には変わっていないが、作業編制の都合で相棒の変更はしばしばで、顔は思い出しても、姓

名や出身地となるとほとんど覚えていない。もし私がシベリアで倒れていたとしても、その死にざまを伝えてくれる人はなかったのではと思う。死生苦楽を共にしながら、今日語り合う戦友や戦友会のないのが寂しい気さえする。

私は昭和十九年十月十日、歩兵第七五連隊第三中隊（会寧）に現地入隊した。北朝鮮の清津と会寧を結ぶ線を底辺とした三角形の頂点にあたる茂山にあった茂山鉦山の職員として二年十カ月勤務し、徴兵検査の結果（甲種合格）入隊したが、現地入隊は中隊で十名ぐらいいいた。他の同年兵は新潟県新発田連隊からの人たちであった。同連隊は、かつて張鼓峰をめぐるソ連軍と激闘して以来、北の守りに任じており、私の入隊時には、昭和十六年兵以来の現役兵ばかりであったが、二カ月後にはルソン島へ動員された。二カ月間の猛訓練と内務班の教育は今も忘れない。

昭和二十年一月には、再び新潟県から初年兵を迎え、奏歩兵第二九〇連隊が新しく編制された。この部隊も、七月ごろからソ連軍の進攻に備え、鮮満ソ国境の南陽